

ピアノのソロ『主よ、人の望みの喜びよ』（J. S. バッハ）でリサイタルがスタートした。

（どんな演奏会なんだろう？）

両手の指が鍵盤の上を舞う。息を呑んでいる聴衆に、清澄な水のように透明感のある音色が披露される。やわらかなタッチに込められた渾身の心が、空気を震わせて客席に届き、そして私達の心をも揺さぶってくる。

最後の一音が空間の中に消えて、拍手が起こった。

「みなさん、こんにちは。今日は非常に天気がよく暑いので、いざ幕を開けてみると“誰も来んサート”になるかと心配してました……」

「次に歌うアヴェ・マリアは、最後に“アーメン”という言葉が入ります。私はそれを忘れないように気をつけているのですが、それが“アーメン”どくさい……」

ソフトな語り口から、思わぬジョークが飛び出した。静寂が一転、満員の聴衆からどっと笑い声が吹き出す。オープニングから、お客さんの心をわしづかみにして離さない。

ここは群馬県にある日本バプテスト前橋教会。「チャペルコンサート」を開いているのは、ピアニストにしてバリトン歌手の北田康広さん（37）。北田さんは、生後間もないころから光のない世界で暮らしてきた。しかし、歌ありピアノあり、そして楽しいおしゃべりが、そんなハンディを微塵も感じさせない。

「音楽は、苦しみや悲しみから立ち上がろう、と前向きな気持ちにさせてくれる効用があります。ともに声を合わせて歌うと、勇気が湧いてきます。これが音楽の素晴らしさじゃないでしょうか」

そういいながら北田さんがピアノの前に座った。奥さんの陽子さん（35）が指揮をとる。『ふるさと』を客席の全員で歌った。

♪うさぎ追いし かのやま♪    ♪忘れがたき ふるさと♪

ひときは大きな拍手が鳴り響いた。北田さんのいうとおりだ。声を合わせると、心がつながっていくようだ。聴衆と出演者が一体となった瞬間だった。

「みなさん、素晴らしいですね。とくに感心するのは、自分で歌って自分で拍手をすること。（笑）なかなかそういう人はいません。（笑）。実に前向きで、私が先ほどいった音楽の効用をよく理解されているようですね（笑）」

コンサートも中盤に入ると、誰もが知らず知らず“北田ワールド”にハマっている。

やがて、多くの人たちが身を乗り出すような姿勢になった。こらえきれず、頬を伝う涙をそっと拭う人がいる。北田さんのトークが、自らの生い立ちにおよんだときだった。

「私は未熟児網膜症を患ってこの世に生を受け、わずかに光を感じる程度の視力しかありませんでした。そして、医者の手不届きによって5歳で失明。全盲となってしまいました。その後、両親は離婚。継母との折り合いは悪く、小学校1年生から盲学校の寮に入り、以来16年間、寮生活でした。私の居場所はどこにもありませんでした。家庭のぬくもりも知りませんでした。孤独でした。不安でした……」

どうして、こんなにつらい思いばかりしなければならないのか？この苦しみをどこにぶつけたらいいのか？と悩んでいました。そんな私を救ってくれたもの、私を満たしてくれたもの、それが音楽でした。音楽は崩れ落ちそうになる自分を支え、私に優しく語りかけてくれる唯一のものだったのです。歌を歌い、楽器で音を出しているときだけ、すべてを忘れることができました」

もがいた。苦しんだ。これまでの北田さんの37年。だが、絶望はしない。希望も失われない。全盲の音楽家・北田康広さんの“心の目”には、明るい光が灯っているから一。

立派な音楽家になってもう一度会いたい

昭和40年、徳島県徳島市で北田さんは生をうけた。わずか1600グラム、未熟児だった。母・多恵さんに医師が非情な宣告をする。

「今夜ひと晩、もつかどうか・・・」

驚いた多恵さん。生死の境をさまよう小さな生命を守り抜こうと、必死になった。

「私は母親ですから、あきらめられるわけがありません。一晩中、脱脂綿に吸わせた母乳を中腰になって飲ませました。できることはそのくらいしかなくて・・・」

夜を徹した強い思いが通じたのか、なんとか峠を越えることができた。

「きっと神様が、生かしておけ、といってくれたんでしょうね・・・」

だが、喜びも長くは続かない。その後、2か月間入っていた保育器の酸素濃度が原因で網膜が傷つき、弱視になってしまったのだ。それでもまだ、かろうじてわずかな視力を保っていた。

5歳になった北田さんは少しばかり感じる光を頼りに、絵を描いたり、自転車に乗り田んぼやドブに落ちたりと、どこにでもいる活発な少年だった。

ある日、息子の視力を心配していた母は、よく効く薬があると耳にした。すがるような思いで訪ねると、その注射の効果は抜群だった。

「パッと眼底が開くように、世の中が急に明るくなったんです。それまで見えなかった虫などがよく見えるようになって、喜んで取りにいったのを覚えています」（北田さん）

しかし、強い薬だったせいか、効果は長続きしない。週に1回、注射を打ち視力が蘇る。1か月後、5回目の注射をしたときだった。

「その瞬間“パシーン”と音がしたんです。いっぱいいっぱい張りつめたような、なげなしの網膜が、切れてしまったようでした。痛みはありませんでした。でも、それからまったく見えなくなりました。母の顔がわからなくなってしまったのが、何より寂しかった。

いま考えると、当時で1回1万円、保険も効かなかったから正規の薬ではなかったのかもしれない」

失明したまだ幼い息子の行く末を案じ、多恵さんはあわてた。

割れた風船が修復不可能なように、どうあがいたところで1度失われた視力は取り戻せない。そんなことはわかっている。だが、それでもなお、いや、それだからこそ、何とかしたい。きっと奇跡が起こるはずだー。多恵さんは、そう信じていた。

次第に多恵さんは、宗教にのめり込んでいった。医者からも見放され、そうする以外に頼るものがなかったのだ。

「あそこに行けば治る」

「これが効くかもしれない」

いわれるがままに、何とか工面してお布施を持っていく。だが、人の弱みにつけこんだデタラメな宗教ばかりだった。途方に暮れる母子。

一方で、北田さんの父は一攫千金を狙う金の亡者となっていた。昭和40年代半ば、高度経済成長の流れに乗り、1匹数百万円の錦鯉を養殖し成功を収めた。金儲けに奔走する父と、その金を持ち出し取りつかれたように宗教にすがる母。対照的な両親は、いさかいが絶えなくなっていた。

「それは凄惨な夫婦ゲンカが毎日のように……。暴力をふるう父親が恐ろしかった。とぼっちりが自分に飛んでくるので、怯えた僕は部屋の隅や押し入れに隠れていました。心が休まることはありませんでした。いま考えると、父親だけが一方的に悪いのではないとわかるのですが、とにかく鬼のように怖かった」

小学校1年で盲学校の寮に入った。週末に実家に帰ると、やはり修羅場だった。北田さんから笑顔が消えていた。一家団欒もなかった。あるのは飛び交う怒号と恐怖ばかり。もはや家に居場所はなかった。そして10歳になったとき、とうとう母親が無一文でたたき出されてしまった。

「お母ちゃん、いつ帰ってくれるんや！」

泣き叫ぶ北田少年。やり場のない怒りと虚脱感に襲われた。さらにショックだったのは、両親の離婚直後、すぐに2番目の母親がやってきたことだった。継母は冷たかった。つらくあたった。いびられもした。精神的に追い詰められた少年は、追い討ちをかけられたようだった。

「お前の母ちゃん、どこ行ったんや？代わったんか？」

盲学校でもイジメられた。悲しくて悔しくて、涙がこぼれ落ちた。

甘えたい盛りに“家庭”というものを感じる事がなかった。話したいときにかげがえのない実母がいなかった。

私たち人間は、周りに認めてもらいたい、自分の思いを聞いてほしい、といった欲求があるもの。心身ともに成長する多感な時期、北田少年の“愛”はごっそりと抜け落ちてしまったのだ。

そんな北田さんに、ただひとつ、安らぎをもたらしてくれたものがあった。それは、歌であり、楽器だった。

ギターを爪弾き、鍵盤をたたく。楽器がなくても歌を歌っているだけで、嫌な出来事を忘れることができた。音が出るものであれば何でもよかった。愛情に飢えていた北田少年は、音楽に“愛”を感じていたのだろう。音の世界に“心の平安”を求めているのかもしれない。

ピアノを中心に、ひたすら音楽にのめり込んだ。それだけが生きる糧になっていた。中学生になると、

「難しい世界ではあるけれど、将来は音楽をやっていきたい」

そんな希望を持つようになった。暗く閉ざされた世界しか知らなかった北田さんの心に、初めて明るい光が差し込んでいた。

中学時代の担任・木下桂子先生が話す。

「文化祭のときでした。課題曲のアレンジや各パートの編成も、音楽の先生に代わって北田くんが全部やっていました。それがまた見事でした」

才能が開きかけていた。だが……。

盲学校では鍼灸の勉強が優先され、「音楽を志すなど論外だ」と相手にすらしてくれなかった。障害を持った人が音楽で自立し、実益を得るのは簡単ではない。何か手に職をつけさせなければ……。それが学校側の論理だった。

思いどおりにならず、苛立ちが募った。自分はいてもいなくてもいいんじゃないか、と悲観的にも考えた。孤独な日々がまだ続いていた。

転機が訪れたのは高校時代だった。転任してきた吉村孝雄先生との出会いが、悩んでいた北田さんに勇気を与えてくれたのだ。吉村先生は、ひとりの人間として対等に接し語りかけてきた。音楽の道へ進むことも応援してくれた。

「視覚障害者だからといって、夢をあきらめてはいけない。できないと決めつけてもいけない。それではあとで後悔してしまう。誰が何といてもやってみなさい」

初めて人に認めてもらい、自分は自分のままでいいんだ、自分に与えられたものを伸ばすのが素晴らしいことだと確信できるようになった。劣等感を抱き内向的だった性格も、前向きに変わった。自己肯定が自信を生んだのだ。この経験は、後の北田さんの演奏活動に大きな影響をおよぼした。北田さんは誓った。

「必ず立派な音楽家になろう。そして、母にもう1度会いたい……」

夢を実現するべく、盲学校としては唯一の国立・東京の筑波大学附属盲学校の音楽専攻科に編入する。ピアノ漬けの生活が始まった。ひたすら音楽のことを考え、毎日8時間、鍵盤をたたく。音楽の虫になっていた。苦にはならなかった。むしろ充実感を感じていた。

音楽の基礎を叩き直してくれた恩師との出会いもあった。当時、同校の教諭だった足立勤一先生（現・群馬社会福祉大学助教授）が振り返る。

「ピアノ以外は見えないくらいのめり込んで練習し、メキメキ力をつけていきました。それによって、音楽で人生を切り開いていけるレベルに達し、自信を深めたようです」

さらなる飛躍を期して北田さんは、音大進学を目指した。そこで、人生を決定づけるふ

たつの出来事が待っていた一。

ナンバーワンではなくオンリーワンの存在に

深い苦しみの経験をしたとき、立ち直れないような痛みを味わったとき、言葉や慰めは無力であることが多い。しかし、同じような体験をした仲間がいるだけで、癒されることがある。それが勇気となる場合がある。

北田さんは、点字で受験できる武蔵野音大ピアノ科を受験した。受験生の中にもうひとり、点字受験生がいた。

『さとうきび畑』でブレイクした、13歳年長の新垣勉さんだった。

視覚障害、複雑な家庭環境、そして音楽。人生の共通点がいくつもあった。ふたりはすぐに意気投合した。だが、入試の可否は明暗を分けた。北田さんが合格、点字受験に慣れていなかった新垣さんは不合格だった。

「そこで、新垣のおっちゃんの点字楽譜の勉強を僕が手伝い、逆に歌を教えてもらったんです。おっちゃんは翌年、トップで合格しました。だから、大学では僕が先輩なんですよ（笑）。いつか新垣さんとのジョイントコンサートをやってみたいですね」

お互いの家を行き来し、音楽を人生を語り合った。北田さんの声楽の基礎はこのころ、新垣さんによって伝授され培われたのだ。

音大に入ってしばらくしたころだった。バス停で雨に濡れながらたたずんでいた北田さんに、そっと傘がさし出された。ピアノ科の同級生・陽子さんとの出会いだった。陽子さんが、ちょっとだけテレながらいう。

「初めて遊びに行ったとき、ギターを弾きながらカンツォーネを歌ってくれたんですよ。それが……。少しキザでしたけどね（笑）。そのとき思ったのは、ピアノ科なのになんでこんな歌が歌えるのって。もちろん、ピアノの腕も全然かないませんでした。ずいぶん、教えてもらいました」

ほどなくして恋心が芽生えたふたりは、大学を卒業してすぐ結ばれた。コンサート活動をはじめた北田さんが歌を披露するとき、陽子さんは伴奏を務める。いま、ステージという名の感動の世界を構築できるのも、陽子さんとの二人三脚ならではなのだ。

その後、15年間離れ離れになっていた母・多恵さんを徳島から呼び寄せた。苦勞をかけた母、そして世話になった多くの人々、コンサートに来てくださった方たちに音楽を通してお返しをしていきたい。現在、全国のホールや教会、学校などを回り、年間約50回のステージをこなす北田さんの、ささやかな願いである。

チャペルコンサートが佳境にさしかかってきた。ピアノと歌の間のトークも熱を帯びてくる。自らの歩んできた道を振り返りながら、どうしたら輝いて人生を送っていけるのか、やさしく語った。

「自分に自信を持って生きてほしい。自分は自分のままでいいのです。他人と比較すると劣等感を抱いてしまいます。ありのままの自分を受け入れ、ありのままの自分を生きてみる。人を羨むのではなく、自分らしい輝きを大切にするとき、そこに光が差してくるはずです」

「悲しいとき、つらいとき、私は思いました。せめて1分だけでいい。私に視力をいただけるとしたら、夜空に輝く満天の星を仰いでみたい、と。それはかなわない夢でした。それでも、私は絶望しません。

ナンバーワンではなく、世界でたったひとつの存在“オンリーワン”を目指すのです。小さくてもいい、自分にしかできないことにベストを尽くす。そうすれば必ず道は開けてきます。あなたは、この世にたったひとりしかいない存在なのです。障害があっても、どんなに苦しくても、自分の代わりはいないのだ、そう私はいつもいい聞かせています」

シーンと静まり返る聴衆。目頭を押さえる人が多い。アンコールの最後はエルガーの『愛の挨拶』だった。お客さんと一緒に作りあげたアットホームなコンサート。クラシックから叙情歌、流行歌まで、歌ありピアノあり、そしてトークあり。北田さんにしかできないオンリーワンのステージは、いつまでも拍手が鳴りやまなかった。

これまでの北田さんの歩みは、激しいまでに険しかったからこそ、音楽のみに取り組んでも出せないような、深い音色がにじみ出ているのかもしれない。

ピアノで人生のメッセージを歌い、“声”という楽器を用いて希望を奏でる北田康広さん。その心の中には、光をとらえる“目”があった。

—あなたは“心の目”で、見ていますか？